

うえみはやし
上 見 林 遺 跡

— 主要地方道長野信州新線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1993・3

長野市教育委員会

序

社会生活の変化と共に「物の豊かさ」から「心の豊かさ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできぬ、貴重な国民的財産であると考えます。

特に埋蔵文化財は、直接大地に刻み込まれた歴史であり、当時の物質文化のみならず信仰・宗教等の精神史など、文化の始源をも内包する基準資料であり、埋蔵文化財そのものが歴史・文化を考えるうえでの実証者といえましょう。

このたび主要地方道長野信州新線建設事業にともない、篠ノ井塩崎所在の上見林遺跡の発掘調査を実施いたしました。

事業予定地周辺は過去において重要な埋蔵文化財が発見されており、古代史研究上注目されていた地域であり、今回の調査でも多大な成果が得られました。

本書はその成果を要約し、長野市の埋蔵文化財第56集として報告するものです。この報告書が地域古代史の解明や文化財保護の一助として、学術的に関係各方面に広くご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書刊行にいたるまで公私にわたり多大なご援助・ご指導を賜りました関係諸機関ならびに各位に心からお礼申し上げます。

平成5年3月

長野市教育委員会

委員長 奥村秀雄

例　　言

- 1 本書は、緊急地方道整備事業（主要地方道長野信州新線建設）にともない、平成2～4年度事業として実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査事業は、長野県長野建設事務所長と長野市長との契約に基づき、長野市教育委員会が受託し、長野市埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 発掘調査地籍は、長野市篠ノ井塙崎（四野宮）字見林に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地「上見林遺跡」（長野県埋蔵文化財包蔵地番号9625）「八ツ塚古墳群」（同9626）範囲内に位置する。
- 4 本書作成における作業は、各調査員が分担し、青木が総括した。
- 5 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会（担当 長野市埋蔵文化財センター）で保管している。

目 次

| | |
|-------------|----|
| 序 | |
| 例 言 | |
| I 調査経過 | |
| 1 調査の契機 | 1 |
| 2 調査の経過 | 2 |
| 3 調査体制 | 4 |
| II 上見林遺跡の環境 | 5 |
| III 調査内容 | |
| 1 調査の概要 | 11 |
| 2 A地区 | 15 |
| 3 B地区 | 20 |
| 4 C地区 | 21 |
| 5 D地区 | 26 |

挿 図 目 次

| | |
|-----------------|-------|
| 図1 発掘調査地とその周辺 | 1 |
| 図2 上見林遺跡の環境 | 5 |
| 図3 中郷神社古墳測量図 | 7 |
| 図4 周辺遺跡の分布と字境 | 10 |
| 図5 調査対象の範囲と調査地区 | 12 |
| 図6 調査範囲全体図 | 13・14 |
| 図7 A地区測量図① | 17・18 |
| 図8 A地区測量図② | 19 |
| 図9 A地区出土遺物実測図 | 19 |
| 図10 B地区測量図 | 20 |
| 図11 C地区測量図① | 22 |
| 図12 C地区測量図② | 23・24 |
| 図13 C地区出土遺物実測図 | 25 |
| 図14 D地区測量図 | 27 |

I 調査経過

1 調査の契機

主要地方道「長野信州新線」は、長野市篠ノ井旧市街と、篠ノ井二ツ柳・石川地籍を経て山間部の信更地区及び、上水内郡信州新町国道19号線とを結ぶ幹線道路として利用されている。長野県長野建設事務所では、「緊急地方整備事業」として、同路線中、篠ノ井二ツ柳・石川地籍街路を迂回させるためのバイパス（通称四野宮バイパス）建設を計画し、篠ノ井塙崎四野宮地籍において幅員11m、延長500mに及ぶ新規路線の開設に、平成元年度より着手する運びとなった。

糸子山の山腹を横断する形となるバイパス計画路線は、縄文時代及び平安時代の集落遺跡と目される「上見林遺跡」（長野県埋蔵文化財包蔵地番号9625）範囲に接し、古墳8基の存在が伝えられている「八ツ塚古墳群」（同番号9629）分布域に該当するほか、長野市指定文化財「池ノ上古墳」（同番号5587）、「中郷神社古墳」（同番号5574）に近接する。これら周知される埋蔵文化財包蔵地の分布状況を勘査し、市教育委員会および事業主体長野県長野建設事務所との協議に基づき、建設用地内に包蔵が予想される埋蔵文化財に関しては、発掘調査を実施して記録保存をはかる措置が決定された。



図1 発掘調査地とその周辺 (1 : 20,000)

2 調査の経過

発掘調査に先立って実施した現地踏査においては、建設計画用地の緩斜面を中心として若干の土器破片が採集され、また、石室構築材らしき石材が集積されて古墳の残穴を思わせる石積みが数か所に確認された。これらをもとに、発掘調査対象範囲としてA～Dの4地区を路線中に設定し、平成2、3年度の2次にわたって発掘調査を実施する計画とした。

第1年次（平成2年度調査）

平成2年度の調査範囲は、計画路線石川地籍よりの北半部分にあたり、C・D地区が対象となった。現場における発掘作業は、果樹等の収穫終了を待って、12月20日に開始され、重機を援用したC地区表土除去から着手した。予想以上に表土層の堆積が薄く、遺物出土もまばらな状態にあり、作業の進行は殊の外順調であった。26日にはD地区において試掘坑を設定し、あわせて繁茂する雑草木の伐採を行ない、年内の作業を終了した。1月9日、作業を再開し、C地区的調査範囲を拡張して溝跡を検出するに至った。あわせてD地区において、重機による表土除去を実施し、溝跡等を検出するに至り、古墳残穴の石積みについても検出作業を着手した。1月17日には、D地区における発掘作業・記録作業を終了し、C地区の一部を残して現地作業を中断することとした。3月15日に至り、C地区の未着手範囲について作業を再開し、溝跡、土坑などを検出するに至った。25日までに、発掘作業・記録作業を終了し、現地における発掘調査を完了した。

第2年次（平成3年度調査）

平成3年度の調査範囲は、計画路線の南半、中郷神社古墳西側に接する部分に至るまでの、A・B地区が対象となった。9月7日、まずは、B地区における古墳残穴状石積み周辺の雑草木伐採に着手し、12日に現況地形測量を、17日からは検出作業を開始した。石材露呈及び下層基盤面までへの掘削は25日に終了し、30日測量作業実施をもって同地区の現地作業を完了した。11月25日、中郷神社西隣に位置するA地区において、重機を援用しての表土除去に着手し、翌26日に作業員による検出作業に移行した。基盤層までの表土堆積は薄いものの、果樹等の耕作による擾乱が少ないため、比較的規模を大にする溝跡が集中して良好に検出された。12月2日には市道北側の範囲における掘削を終了して南側へと移動し、13日までには全体での掘削作業を終了した。12月17日に同地区における測量等記録作業を終え、当該事業にともなう発掘調査のうち、現場でのすべての作業を完了するに至った。

以上2年次にわたる発掘調査成果に関して、平成4年度に整理作業に着手しここに本報告書刊行に至った。



調査着手前



C地区東側の調査（H2年）



C地区西側の調査（H 2年）



D地区的試掘調査（H 2年）



C地区西側の調査（H 2年）



C地区西側の調査（H 2年）



A地区的調査（H 3年）



A地区的調査（H 3年）



A地区的調査（H 3年）



A地区的調査（H 3年）

3 調査体制

調査主体者 長野市教育委員会 教育長 奥村秀雄
調査機関 長野市埋蔵文化財センター 所長 水沢国男(平成2年度) 小山 正(平成3年度～)
庶務係 所長補佐 小山 正(平成2年度) 山中武徳(平成3年度～)
職員 青木厚子

調査係 調査係長 矢口忠良
主査 青木和明 専門主事 小松安和
主事 千野浩 専門主事 中沢克三(平成2年度)
主事 飯島哲也 専門主事 大室昂(平成2年度)
専門員 中殿章子 専門主事 羽場卓雄(平成3年度～)
専門員 横山かよ子 専門主事 太田重成(平成3年度～)
専門員 森泉かよ子(平成3年度) 専門員 山田美弥子(平成4年度)
専門員 笠井敦子(平成4年度) 専門員 寺島孝典(平成4年度)
専門員 山崎佐織(平成4年度) 調査員 矢口栄子 青木善子
参加者 岡沢治子 徳成奈於子 池田見紀 小泉ひろ美 西尾千枝 向山純子
測量委託 有限会社 写真測図研究所

発掘調査

参加者 内山直子、太田豊一、岸田武子、北沢やすい、北村利雄、駒村より子、塩原恵美子、島田ふくの
島田茂子、島田ミヨ子、清水節子、高橋清子、立山恵美子、田中きよ江、西沢乾、南沢近登
南沢伸三、松林泰子、松崎とみ子、三宅計佐美、三宅利政、宮崎和子、宮本基江、宮本陽子
矢島喜和子、山田令子、山本恵美子、吉沢澄子

調査報告書作成を含めて3年にわたる調査のなかで、多くの方々のご支援ご助力をいただいている。事業主体の長野県長野建設事務所関係者はもとより、地元旧地権者及び隣接地権者の方々、施工業者の川中島建設株式会社各位には、現地調査の便宜をその都度はかっていただいた。また、出土した金属製品の保存処理について、長野県埋蔵文化財センター調査研究員 白沢勝彦氏のご指導を得た。厚くお礼申し上げたい。



A地区と中郷神社古墳



調査参加者

II 上見林遺跡の環境

上見林遺跡（長野県埋蔵文化財包蔵地番号9626）は、篠ノ井塩崎のなかでも山腹山麓部を中心とした四野宮地区に位置し、埋蔵文化財包蔵地としての遺物散布範囲は、字見林のうちの上段山腹部（通称上見林）、テラス状に張り出した緩斜面約3,000m²に設定されている。ほとんどが宅地と果樹畑に利用され、耕作等にともない採集された出土遺物には平安時代土器及び織文時代石器が知られている。山腹部に立地する平安時代集落遺構がその中核と推定されるが、実態は未だ明かとはいえない。低地、自然堤防上に発達した、塩崎・篠ノ井遺跡群と対比される集落立地と環境については、一連の地域内歴史景観の中で注意されるべき存在といえる。

一方、上見林遺跡範囲の内外には、かつて八ツ塚古墳群（番号9626）8基が存在したという。かなり早い時期から破壊が進んだらしく、昭和48年度の分布調査時点においては、すでに石室構築材らしき石材の遺存を認めるのみであったという。出土した遺物には直刀、須恵器直口壺、勾玉、金環、丸玉などが伝えられる。

山腹部にまで早くから開発が進行したこの地区においては、すでに所在を確認できない状態にある多数の小古墳が存在することを、八ツ塚古墳群以外にも予想しておかなければならぬものと思われる。

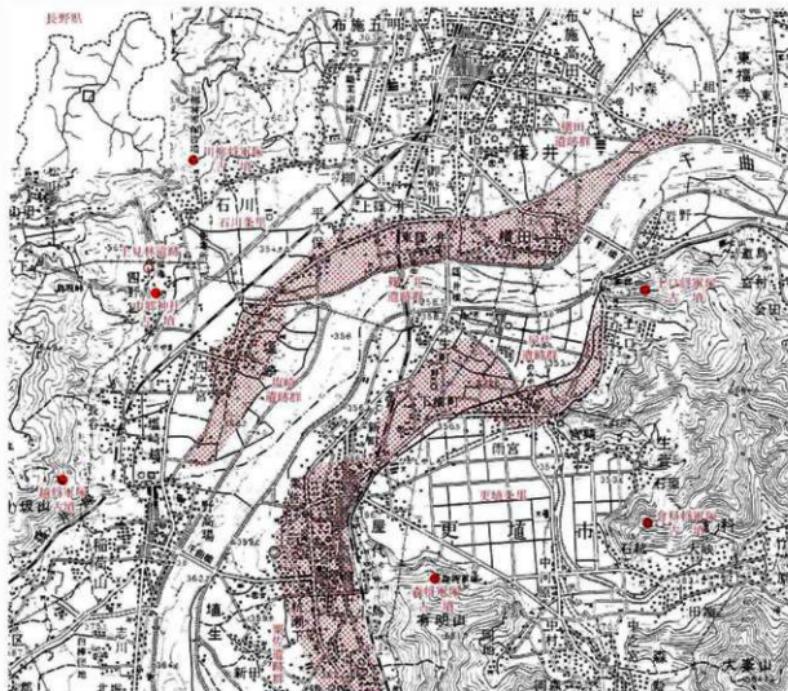


図2 上見林遺跡の環境 (1 : 50,000)



上見林遺跡と菫子山の遠景

四野宮地区には、中規模な前方後円墳・円墳を中核として群集するらしいいくつかの古墳群が確認されている。隣接する石川地籍の古墳分布ともあわせて、比較的高密度の古墳分布域を抽出することができよう。次に各古墳の概要について紹介する。

1 中郷神社古墳（番号5574）　所在地：篠ノ井塙崎（四野宮）四之宮　地目：山林

概要：中郷古墳とも呼ばれる前方後円墳。市指定文化財（昭和42年11.1指定）。中郷神社の背後に広がる社叢中にあり、舌状に張り出す台地上に位置する。全長53m、後円部径30m、高4.5mを測り、埋葬施設は不明、墳丘の一部に葺石の露呈が観察される。遺物出土の伝承はない。後円部南側が大きく崩落している外は、墳丘は比較的良好に保存され、5世紀代構築の更埴市土口・長野市岩野所在の土口將軍塚古墳の墳形に近似することが指摘されている。（岩崎事也 1982 「中郷古墳」『長野県史 考古資料編 全1巻(2)』）

なお、この前方後円墳の東方には2基の小円墳が分布し、中郷陪塚1・2号古墳（5575）と命名されている。かつて発掘されたらしく、馬具、直刀、勾玉が神社に保管されるという。

2 池ノ上古墳（番号5587）　所在地：篠ノ井塙崎（四野宮）池ノ上・菫子山　地目：畑

概要：市指定文化財（昭和44年9.1指定）。上見林集落から北方、河越池の西方山腹に位置する。径15m、高さ3m程の円墳で、墳丘・石室とも良好に保存されている。石室は南に開口する横穴式石室で、玄室部全長4.2m、最大幅2.5m、高さ2.3m、胴張両袖形を呈し、羨道部は幅1.2m、長さ5mを計り、かなり長いことを特色とする。発掘は古い時期と予想され、それにもなう出土遺物の存在は伝えられていない。位置的に八ツ塚古墳群に最も接近するため、一連の構築に基づく可能性が考えられる。

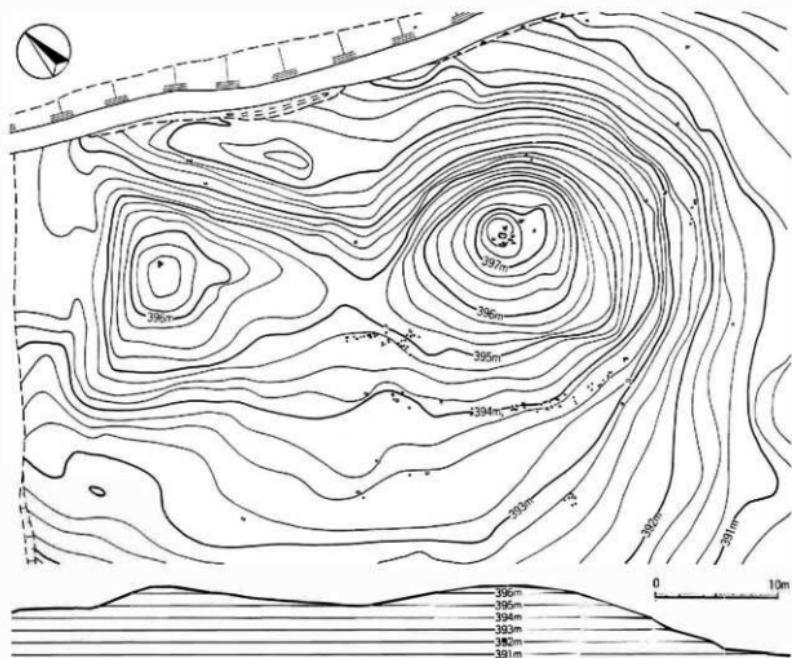


図3 中郷神社古墳測量図 (1 : 400 岩崎 1982より転載)



中郷神社古墳 (北西より撮影)

3 丸山古墳群4号古墳（番号5534） 所在地：篠ノ井石川（上石川）丸山 地目：宅地

概要：2号古墳とも呼ばれる。市指定文化財（昭和47年3月31日指定）。昭和47年「老人憩の家」建設にともない発掘調査された。沖積面を臨む浸食崖上の緩斜面に構築された円墳と予想され、墳丘の破壊が著しく、その規模は不明である。石室も天井石のほとんどと狭道部が失われていたが、東に開口する横穴式石室であり、玄室部全長4.2m、幅2mを測る。遺物は過去の発掘により搅乱された状態にあり、金銅製大刀1、刀子2、鉄鎌、金環2、丸玉、巒1、雲珠1、須恵器瓶1、鉄釘が検出され、市教委において保管している。このほか、石室奥壁頂上から約1m下の中央に線刻壁画と考えられるものが確認されている。

なお、他に3基を数えるとされる丸山古墳群のうち、4号古墳下斜面に石室残欠を遺存する丸山古墳群1号古墳（番号5533）を除いて、昭和48年分布調査時には所在不明とされた。

4 四野宮将軍山古墳（番号5579） 所在地：篠ノ井塩崎（四野宮）将軍山 地目：山林

概要：薬子山の山頂、南端に位置し、薬子山1号墳、王塚とも呼称される。径32m、高3.7mを測る円墳であり、更埴地域においては越將軍塚古墳と並んで最大規模の円墳といわれる。頂部には発掘による小凹地の存在も伝えられるが、未発掘の可能性も指摘されている。石室・墳丘施設の実態は不明であり、遺物の出土も伝えられていないが、その規模立地より、薬子山山腹に分布するいくつかの古墳群の中で、盟主的な位置を与えることができるかもしれない。また、相前後した築造年代が予想される前方後円墳、中郷神社古墳との関係については、築造年代の順、被葬者の性格も含めて、当該地区の古墳群の形成を理解する上での大きな課題といえる。

この将軍山古墳を南端として北西方向に、5基（一説には2基）の小円墳が15～20m間隔で並び、四野宮将軍山古墳群2～6号（番号5583～5586）と仮称されている。径3～5m、高0.6m前後を測り、旗塚とも称され、古墳に該当するか否か、検討を要する。

5 薬子山古墳群（番号5580～5582） 所在地：篠ノ井塩崎（四野宮）薬子山 地目：山林

概要：将軍山古墳の位置する薬子山山頂から南西へ突出する山稜中腹に、3基（一説には7基）の円墳が分布し、薬子山古墳群と命名されている。上から1・2・3号の順になる。径20m以上を測る1号古墳を除き、径5m以下の規模とされ、古墳に該当するか否か、検討を要するところである。

なお、四野宮将軍山古墳群5基を含めて薬子山古墳群と呼ぶ場合があり、呼称には若干の混乱が生じている。

6 大伯母古墳（番号5578） 所在地：篠ノ井塩崎（四野宮）将軍山 地目：山林

概要：薬子山の南山腹斜面に位置する円墳で、上方に県道川口田野口篠ノ井線に接している。径11m、高2.5mを測り、石室構造は不明ながら横穴式石室と予想されている。

7 小日向古墳（番号5577） 所在地：篠ノ井塩崎（四野宮）小日向 地目：山林・畑

概要：薬子山の南山稜近くの山腹斜面に位置する円墳で、墳丘は原状を留めない程度に改変され、規模は不明となっている。横穴式石室が露呈しており、その一部は破壊を受けている。

8 秋葉山古墳（番号5576） 所在地：篠ノ井塩崎（四野宮）秋葉山 地目：山林

概要：薬子山の南山稜近くの山腹斜面に位置する円墳で、径7m、高1.9mを測る。墳丘は半壊状態にあり、露呈した横穴式石室の一部が破壊を受けているという。

9 鎧坂古墳群（番号5529～5526） 所在地：篠ノ井石川（上石川）鎧坂 地目：山林

概要：菜子山から北へと張り出す尾根上に位置し、総数は5～6基を数えるという。いずれも墳丘の破壊著しく、露呈した横穴式石室を残存させるものが多い。所在不明となっている古墳があり、また、隣接地籍に分布する虚空藏山古墳群3基と混同されている可能性もあり、注意を要する。

A 新規発見された墳丘状遺構 所在地：篠ノ井塙崎（四野宮）宮之前 地目：畑・水田

概要：平成3年度に、高速道路開通事業にともない実施された石川条里遺跡の発掘調査の際、字宮之前において人工的盛土を有する墳丘状の遺構が検出された。字宮之前は、中郷神社の位置する舌状台地の延長、丘陵部分に該当し、四野宮遺跡とも呼称された一帯で、発掘調査では弥生時代以降平安時代までの住居址約50軒が検出された。そのなかで、現地形においても周辺より突出した高まりが観察される地点で、検出範囲は一部分にとどまるが、最大1.5mの盛土による墳丘状の遺構を確認するに及んだ。盛土の範囲は、幅10m以上、深さ2mの溝（堀）に囲まれており、平面形は内法で径30mを測る円形と予想される。溝は中世段階に掘り直されている可能性があるが、盛土下の旧地表面の年代は弥生時代末期に比定されるものであり、周囲を構で区画した低墳丘の古墳あるいはそれに準ずる墳墓となる可能性が指摘できる。調査成果の整理検討による正式報告を期したい。

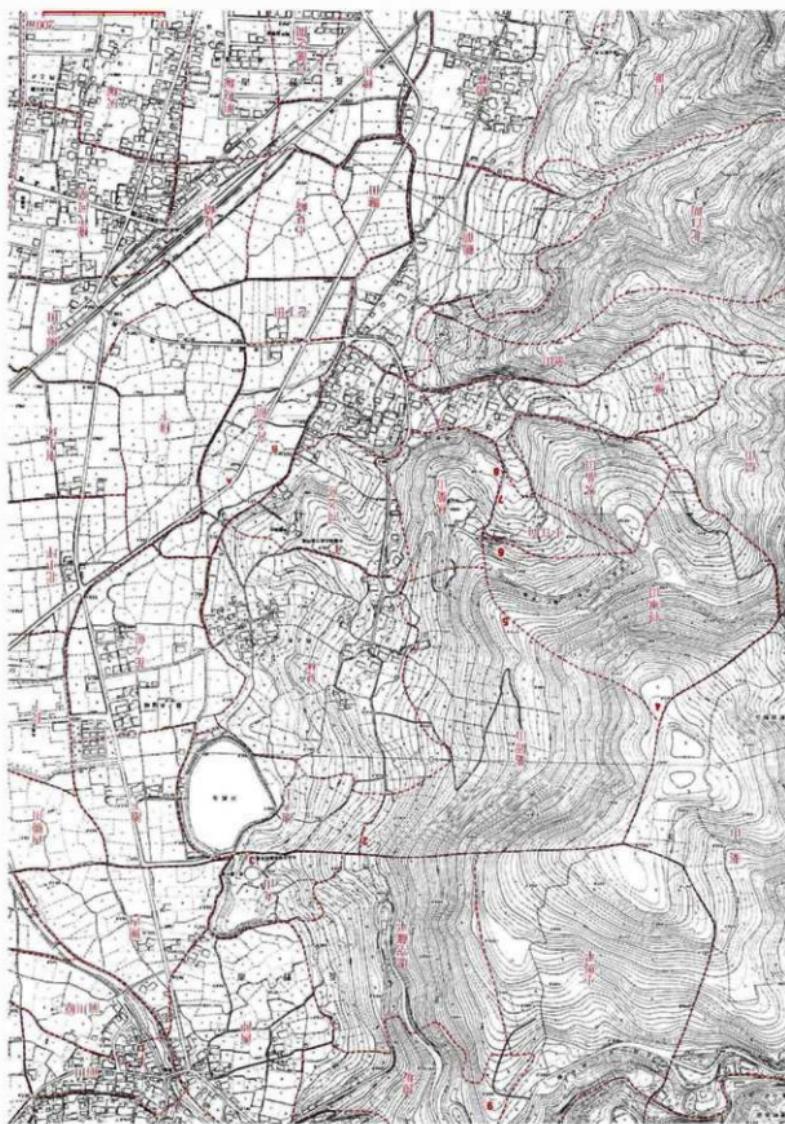
B 墳丘状遺構の可能性をもつ地点 所在地：篠ノ井塙崎（四野宮）宮之前 地目：畑・水田

概要：新規発見された墳丘状遺構から南西へ60m地点、水田域（現在は転作により畑に利用されている）の中に径20m程度の円形に近い地形の高まりが観察され、同様の墳丘状遺構となる可能性が指摘される。溝部分と推定される水田域からの比高差は約1mであり、規模としてはA遺構より一回り小形となりそうである。東側の水田域が埋め立てにより盛土され、旧状が損なわれているが、かつては水田の中で島状に孤立した畑地を呈し、「高畠」と呼び習わされたという。低墳丘の古墳あるいはそれに準ずる墳墓としての有力な候補地点といえる。



四野宮地区の空中写真

7 小日向古墳 8 桃塚山古墳 9 錦坂古墳群 A 錦坂古墳丘陵区地質図
1 中郷御比古墳 2 道ノ上古墳 3 丸山古墳群4号古墳 4 阿賀野川源流山古墳 5 美子山古墳群 B 須坂丘陵可能地質図
6 大船母古墳



III 調査内容

1 調査の概要

新設道路線は、上見林集落が形成された山腹テラス状緩斜面の外縁部を区画するように設定され、山麓へ向かう急斜面との変換地点に該当する部分がほとんどである。このため、居住域としての上見林遺跡中心範囲からはやや距離を置く位置関係といえる。ただし、所在不明となっている八ツ塚古墳群の残欠が路線内に存在する可能性は高く、それを考慮しながら建設路線範囲をA～Dの5地区に区切って調査を実施した。

A地区

建設路線南端、中郷神社古墳の位置する舌状台地付け根に該当し、当該調査範囲内では最も平坦面を形成し、畑地として利用される地区である。中郷神社古墳前方部墳裾からわずか15mの距離を置く位置にあるため、当該古墳にかかる外郭遺構、あるいは時代を異にした集落遺構の存在が想定されていた。発掘により、古墳時代に属する可能性をもついくつかの土坑と、平安時代に開削された排水用の溝、及び集石をともなう性格不明の溝が検出されるに至ったが、中郷神社古墳との関連を示す遺構遺物の出土は認められなかった。

B地区

A地区より北へ小谷を隔てて対峙する緩斜面に該当する。畑として造成されている一角に、古墳石室構築材らしい大形の板石が露呈する荒地が存在し、古墳残欠の存在が予想されていた。発掘の結果では、その存在を証明する痕跡は検出されなかった。

C地区

建設路線のほぼ中央、上見林集落の乗るテラス状の尾根頂部先端に該当し、畑地・果樹畠として利用されている地区である。比較的平坦面が形成されており、集落遺構の存在が予想されるとともに、果樹畠の一角に古墳石室構築材らしい大形板石の一部が露出し、古墳残欠の存在も予想されていた。発掘により、古墳時代に属する可能性をもついくつかの土坑と、平安時代に開削された集石をともなう性格不明の溝が検出された。古墳構築材と目された板石からは、直接の古墳存在を裏付ける資料を得るには至らなかった。

D地区

建設路線北端のやや谷地形に属する位置にある。傾斜はやや急に属し、畑地として造成されている地区である。比較的多くの転石が散布するなかで、古墳石室構築材らしき大形石材を含んだ集石が、畑境界部分に2か所形成され、古墳残欠の存在が予想されていた。発掘の結果、時期不明の小規模溝と土坑を確認するにとどまり、古墳存在の痕跡を確認するに至らなかった。

まとめ

調査を経た4地区においては、住居址等の住生活を示す遺構の検出は認められず、当該調査範囲は居住域外郭部に位置付けられる可能性が高い。出土遺物における绳文時代所産の石鉈の存在は、上見林遺跡の年代的な上限を示す資料となる。古墳石室の構築材と目される大形板石の存在を除いて直接的に八ツ塚古墳群の存在を確認するには至っていないが、多数の古墳時代土器類須恵器破片の散布状態や、1点ではあるが古墳副葬品の可能性を示す馬銘を検出できた点は、当該古墳群の構成と年代とを推し測るうえで重要な資料を得たものと考える。2地区で確認された集石をともなう平安時代の溝については、住居址等の遺構を伴わないため、生産活動にかかわる何らかの遺構とも考えらる。この時期、当該地区の開発が本格的に着手されたこと物語るものか。



図5 調査の範囲と調査地区 (1 : 2,500)



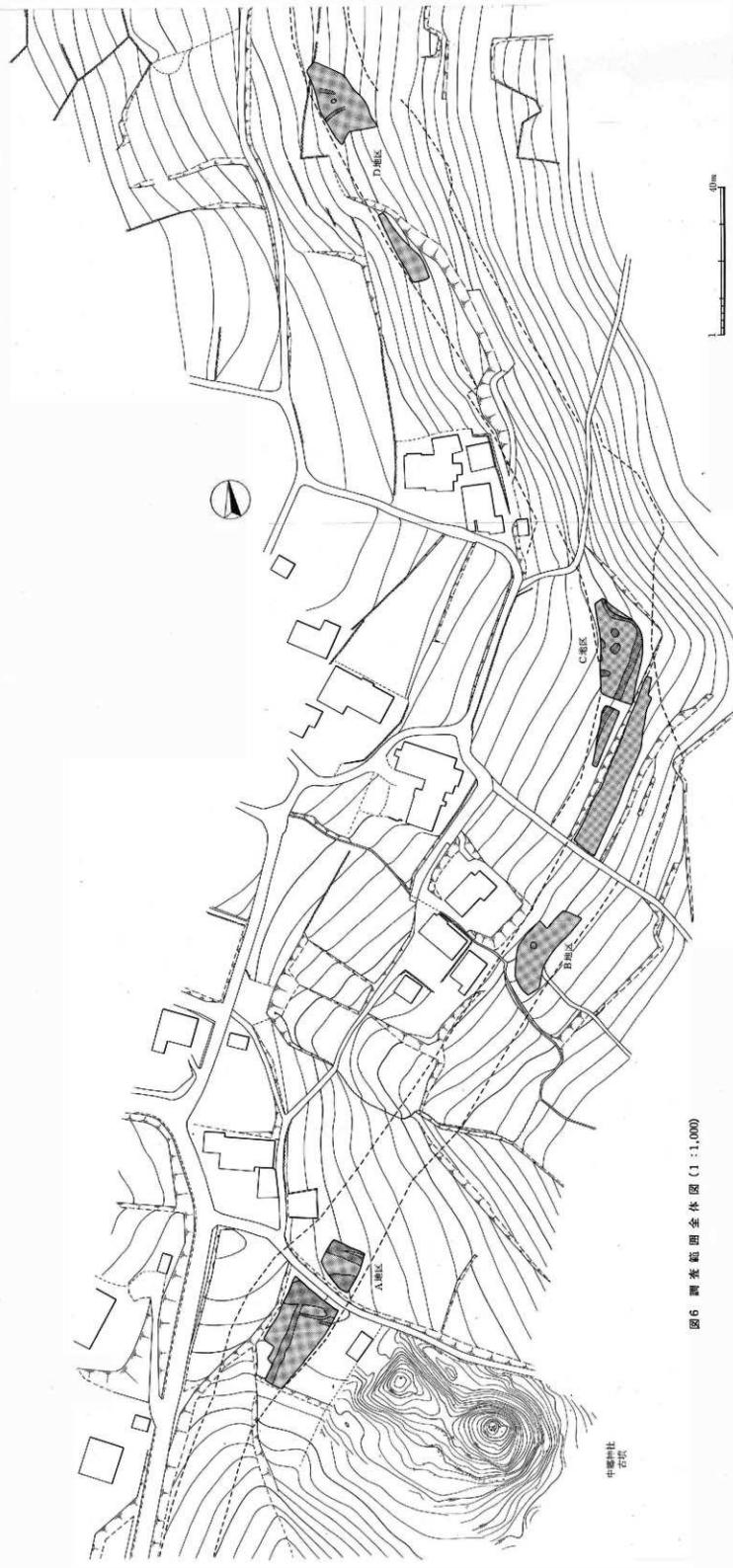
図6 調査範囲全体図 (1:1,000)

中郷村北
古墳

A地

B地

C地



2 A 地区

中郷神社横を下り降りる市道を境に、
掘削範囲は北と南に分断される。

北区（図8）

地表下30cm程の深さで地山となる凝灰岩質層に至る。北側には傾斜に沿って東西に走る溝状の掘り込みが2条確認されるが、その深さは20cm以内と浅く、出土物も検出されない。全体に凝灰岩質の大小の礫が散布し、耕作による搅乱の可能性も考えられる。南側にはSD-1に連接すると考えられる掘り込みの一部が確認される。

南区（図7）

地表下20~40cmで凝灰岩質層に至り、同面で溝群、土坑を検出した。

SD-1

地形の傾斜にそって東西に走る溝群であり、大小の溝が複雑に絡み合って形成されたものといえる。深さは最大で40cm、溝底には大小の凝灰岩礫とともに粗砂の堆積が認められるため、水が流下した形跡は明らかといえよう。尾根状の地形頂部に位置することから、自然流路とは考え難く、人為的に開削された水路としての機能が求められる。溝中からの遺物出土は、土師器破片13点、須恵器破片8点と少量であり、ほとんどが平安時代の所産によるものと判断される。

SD-2

尾根を横断する形で、南北に走る溝であり、幅2~1.5m、深さ40cm前後の規模を測る。検出範囲での溝の延長は約20m、北側はSD-1に切断され、南側は谷地形の中へ収束する。溝底よりやや浮き上がった状態で、大小の安



調査着手前



北 区



南 区

山岩礫が堆積し、溝埋没の初期段階に一括して投げ込まれたかのような状況が想定される。安山岩は人為的に集積された可能性が高く、とりあえず集石状態と判断しておく。出土遺物は少量にとどまり、土師器小破片10点程を検出している。遺物からの判定は困難であるが、溝の開削は平安時代と考えて大過ないものと考える。

C地区においても同様の検出に及ぶこの溝の性格は、不明と言わざるえないが、流水の痕跡もなく、立地的に水路としての機能は求め難いため、ある種の区画を目的とした機能を想定しておきたい。

SK-1

長さ3m、深さ20cmの不整形な土坑であり、覆土上面から古墳時代土師器(?)一個体が検出された。残念ながら出土した土師器は劣化が著しく復元図示することができないが、中郷神社古墳との関連を示す唯一の資料となっている。

出土遺物(図9)

遺構・検出面を通して遺物の出土は少ない。

石錐(1) 検出面より採集された。黒曜石製で、先端部及び基部を欠損し、遺存部分は26mmを測る。表裏とも丹念に調整剝離され、両側縁部には鉛垂状の突起を作り出している。同技法から縄文時代晩期前後の所産として位置付けられる。

須恵器・坏(2) SK-1 覆土中から出土した。底部のみの破片であり、糸切り痕跡をそのままに残す。焼成は良好、調整は丁寧であり、平安時代でも古段階の所産と判断される。



南区 SD-1 周辺



南区 SD-2 周辺



SD-2 集石状態

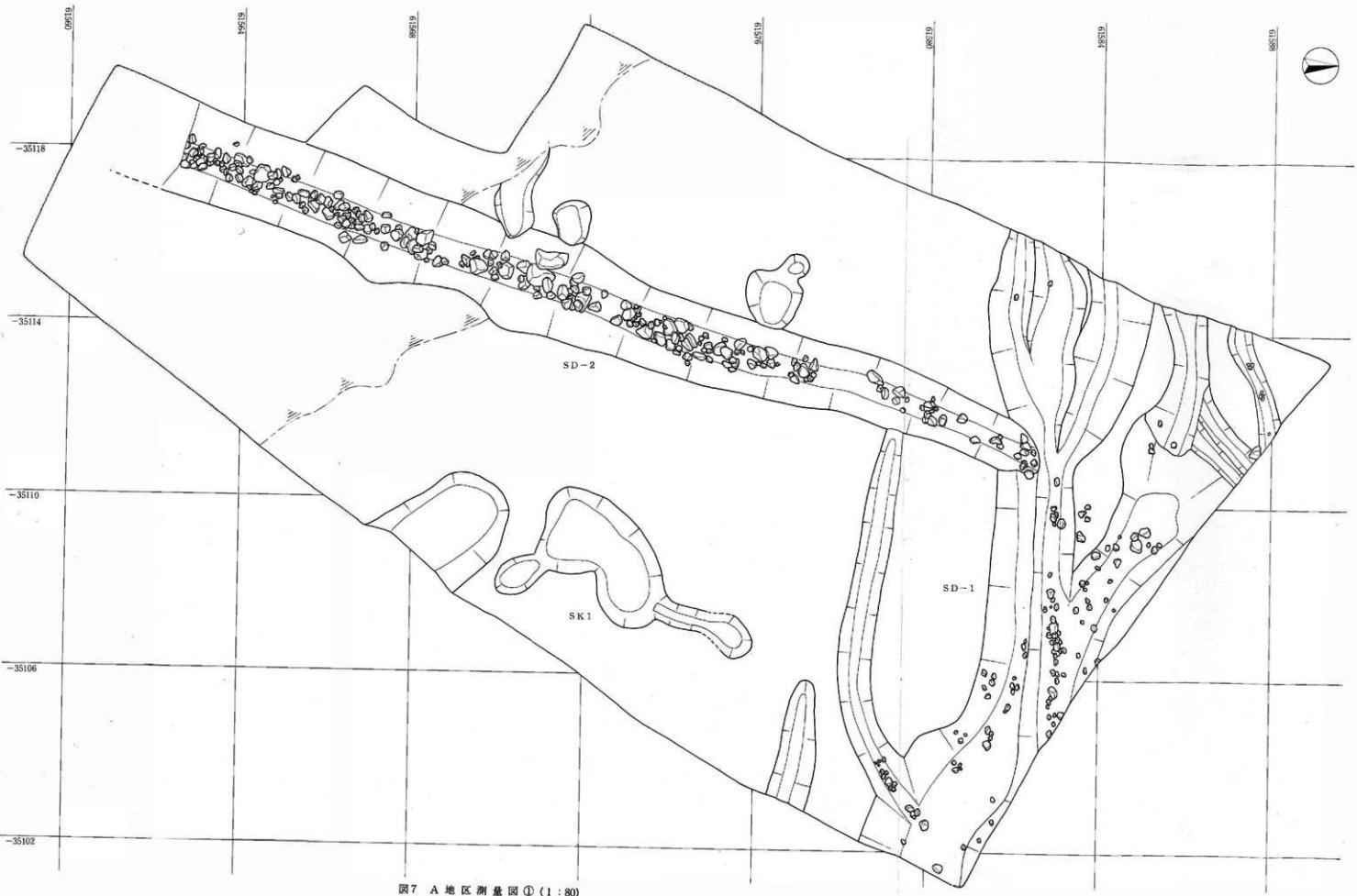


图7 A 地区测量图 ① (1 : 80)

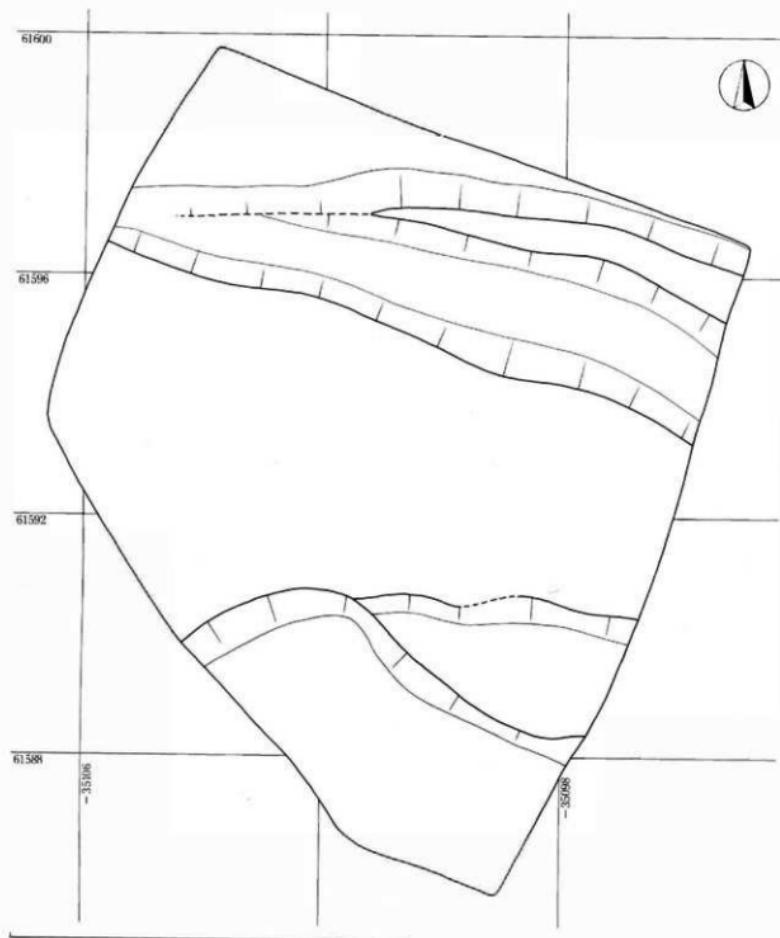
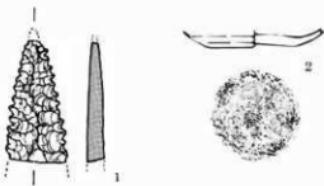


図8 A地区測量図 (1 : 80)

図9 A地区出土遺物実測図
(1-原寸 2-1 : 3)



3 B 地 区

古墳石室の構築材らしき板状石材が露出する地点は、径 5 m ほどの範囲が周辺部分よりわずかに若干の盛り上がりを見せ、古墳残欠を思わせる現状を呈していた。一部が露出する石材を中心として、表土を除去し、その他埋没する石材の検出作業および基盤層までの掘り下げを実施した結果、 1.8×1.7 、厚さ 40cm を測る大形の板石から南東方向にむかって、拳大の礎の集中状態が確認された。その分布状態がまばらであり、また、急傾斜を示して堆積する状態であるため、古墳施設となる可能性は薄いものといえよう。さらに地表より 30cm 程度で、礎を集中的に包含した表土層は基盤層となる凝灰岩由来の黄褐色土層へと移行する。大形石材下部に基盤層を若干掘り込む落ち込みがみられるほか、古墳基底部を示す構造物あるいは古墳構築の際の造成の痕跡等を検出するには至っていない。出土遺物は近代の廃棄物以外に古墳時代土師器破片を少量確認するにとどまる。以上、当該地区においては、古墳との関連を示す明確な所見は得られていない。

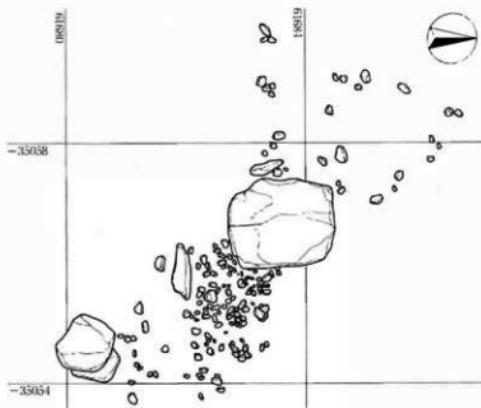


図10 B地区測量 (1 : 80)



発掘前の状態



発掘後の状態

4 C 地区

南北に走る大きな落差の土手によつて東西に分断される。土手下の東側部分は、耕地造成の際に大きく削平され、20cm程の耕作土を除去すると凝灰岩由來の黄褐色土基盤層に至り、遺構を検出するには及んでいない。土手の上面にあたる西側地区のなかで、南側では、耕地造成に際して盛土され、基盤層まで地表下1mを測る。

これにたいして北側では、尾根頂部に該当するため、造成による切り盛りがほとんど認められず、30cm厚の表土耕作土層下が基盤層となっている。この地区においては、溝(SD)2本、土坑(SK)2基、石材埋設遺構(SX)3基を検出している。

SD-1

尾根状の地形を横断する形で南北に走る溝であり、幅2.2~1.8m、深さは最大で60cm以上の規模を測る。検出範囲での溝の延長は約30m、北側は谷地形のなかへ収束するものと想定される。溝底よりやや浮き上がった状態で、大小の安山岩礫が密集して堆積し、A地区SD-2と同様に、溝覆土内での集石状態と判断しておく。出土遺物は比較的豊富であり、須恵器破片70点、土師器破片60点、灰釉陶器破片1点、を検出している。細片が多く、判定困難なものを多く含むが、古墳時代とともに平安時代所産の土器が目立ち、溝の開削時期を平安時代と考えて大過ないものと判断される。当該地区SD-1は、溝覆土内の集石状態、および、規模・立地も含めて、A地区SD-2と相似した様相を呈するものである。性



SD-1 南側



SD-1 北側と SD-2



SK-1

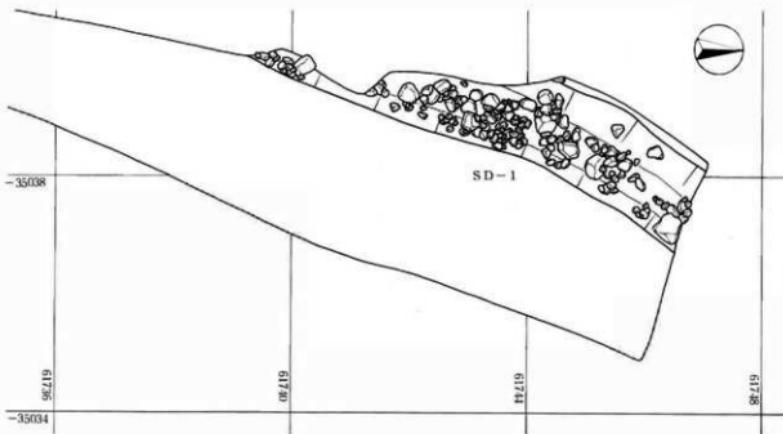


図11 C地区測量図① (1 : 80)

格についても同様に、ある種の区画を目的とした機能を想定しておきたい。

SD-2

地形の傾斜にそって東西に走る溝で、東側はSD-1に切り込まれるものと考えられる。幅1.5~0.8m、深さは最大で30cm。SD-1と比較して小規模であり覆土内に集石を伴わず、かつ、平面形態も若干湾曲をみせて不整形といえる。出土遺物は僅少であり、土師器破片3点、須恵器破片5点を数えるのみである。いずれも古墳時代所産の可能性があり、当該溝開削も古墳時代に属する可能性が指摘される。

SK

いずれも部分的な検出にとどまるが、長さ2m程度、深さ10~20cmの梢円形を呈する土坑と考えられる。SK-1からは土器小破片15点余りとともに馬鈴1点が検出されている。SK-2からの遺物出土はない。馬鈴の検出から古墳時代遺構となる可能性が認められるが、出土遺物は後代の混入による可能性も否定できない。



SD-1 集石状態



图12 C 地区测量图 ② (1:80)

S X

一部が地上に露出していた大形の石材は、長さ2m、最大厚40cmを測る板石であり、基盤層を掘り込んだ3×2mの穴に落ち込んだ状態にある(SX-2)。穴のなかには近代の廃棄物も含まれて、遺構としてはごく近年の所産と判断される。地上では確認できなかったSX-2の掘り込みは、大形石材を若干上回る規模で、穴と石材との隙間に大小の礫を詰め込んだ状態にある。同じく近代の廃棄物が撒出する。さらにもう1基、一部が確認されたため、当該地区では都合3基の石材を埋設する遺構の存在が明らかとなった。

いずれも構築年代は近代以降と判断されるものであり、人力で移動し難い大形石材にして、耕作の支障にならぬよう、穴を掘り落し入れ、土中に埋め込んだ状況が想定されよう。ただし、形状から考えて石材が古墳石室の構築材であった可能性は高く、当該地区に古墳が存在したことを示す間接的な証拠となる。

出土遺物(図13)

石器(1・2) 検出面より採取された。珪岩製で先端部等を欠損している。縄文時代の所産と判断する。

馬銚(3) SK-1 覆土中から検出された。上部突起が欠損するが、紐通しの小孔が一部確認できる。青銅製、鉄造品であり、遺存状態は良好。外面は良く研磨され光沢を有する。内部は丸として小石が封入され、上品な音を響かせる。失われた古墳の副葬品であつた可能性はきわめて高い。

土師器(4) SD-2 覆土より出土した。小型壺頭部破片であり、古墳時代の所産と判断される。

須恵器(5・6) 検出面より採取した蓋(5)と、SD-1 覆土より出土した高杯脚部(6)破片である。6世紀前半の所産と判断され、古墳関連遺物となれば、その年代根拠となる。

須恵器・壺(7) SD-1 覆土より出土した。底部のみの破片で、糸切り痕跡をそのままに残す。

灰釉陶器・壺(8) SD-1 覆土より出土した。10世紀代の所産か。

このほか検出作業に伴い土師器・須恵器破片が50点出土している。古墳時代須恵器が目立ち、かつて存在したであろう古墳の関連遺物となるか。

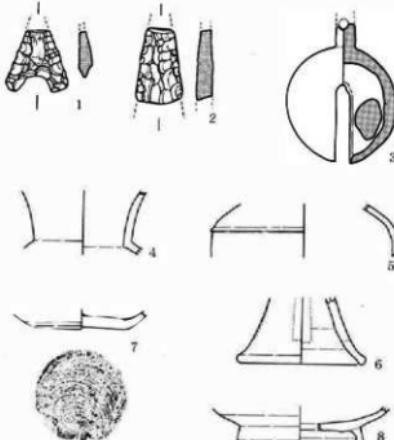


図13 C地区出土遺物実測図(1～3—原寸 4～8—1:3)



S X-1 と S X-2

5 D 地 区

石室の構築材らしき大石を一部に露出させ、古墳の残欠を思わせる地点は、畑の土手一角に周囲から突出した高まりをみせ、その高まりの多くが大小の礫により構成されるものと予想された。古墳石室の基部遺存を想定して、大石周辺の大小の礫を除去しながら検出を進めたところ、南北方向に走る石垣状の遺構存在が明らかとなつた。長さ2m高さ50cm程度で、大石に連接する位置に人頭大前後の礫を3~4段積み上げた簡略な構造を示す。検出の過程で伴出した遺物は近代の廃棄物を含み、畑境界における石垣の一角が、耕作とともに石捨て場として利用されながら埋没し、やや高まりをもつて突出部が形成されたものと判断せざるをえない。

当該地区は、近年の果樹矮化栽培への移行時に、小形バックホーなどにより深い搅乱を受けた部分が多く、表土以下基盤まで旧状を留める範囲は限定されている。検出した遺構は、2本の溝と1基の土坑とに留まる。溝は幅1m以内、深さは10cm以内の小規模なものであり、それれ数点の土師器破片が伴出した。遺物としては、このほかに検出面より須恵器破片20点、土師器破片130点を探取し、比較的その散布が豊富であることを確認した。



発掘前の状態



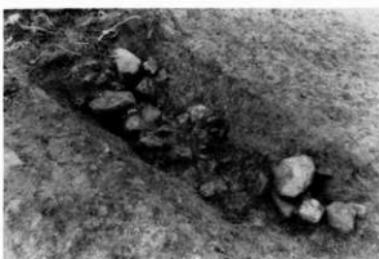
石垣の検出状態



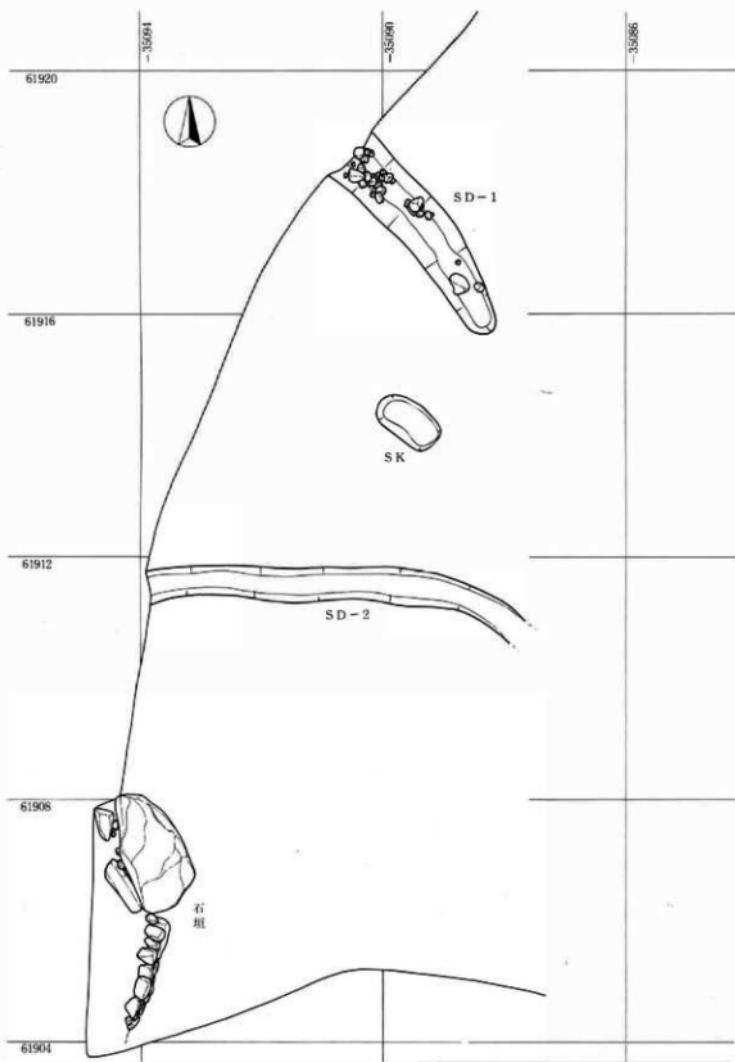
発掘後の状態



SD-1・2とSK



SD-1



長野市の埋蔵文化財第56集

うえ　み　はやし
上見林遺跡

平成5年3月24日 印刷

平成5年3月31日 発行

編集 長野市教育委員会
発行 長野市埋蔵文化財センター
印刷 奥山印刷工業株式会社